

今年度最後の部報は、保健体育科指導員の波江野寛之先生、杉浦大作先生に、今年度の指導員訪問の総括と来年度へ向けての重要点について書いていただきました。

岡崎市立葵中学校

波江野 寛之

1 指導員訪問を振り返って

(1) 運動量を確保し、運動のこつや楽しさが実感できる

新型コロナウイルス感染症の拡大により、分散登校やオンライン授業が行われた。通常の授業においても活動が制限され、運動の機会が激減した。また体育の授業をはじめ、運動会、体育大会、部活動など、学校や屋外での運動量にも影響を与え、引き続き、子供の運動不足が懸念される。文部科学省が行っている「体力・運動能力調査」によると、現在の子供の体力・運動能力の結果を、その親の世代である30年前と比較すると、ほとんどのテスト項目において、子供の世代が親の世代を下回っている。子供の体力を向上させるためには、体育・保健体育科の授業における運動量の確保が重要となる。また、教師は子供の発達の段階に見合った運動実践ができるような教材研究を行う。ペアやチーム学習において、友達と協力し運動のこつを見つけながら何度も繰り返すことで、できなかった運動ができるようになり、授業を楽しく感じ、運動に夢中になっていく授業づくりが大切である。

① ゲーム形式を中心にして技能を高める授業

A中学校のB教諭は、1年生の球技（アルティメット）の実践を行った。チームの戦術的な課題を考えるためには、できるだけ多くのゲーム経験を積み重ねたいと4対4のゲーム形式の活動を中心に行った。ゲーム経験を積み重ねる中で、チームで作戦を模索した。その中で、思考力、判断力、表現力等や主体的に学ぶ力を高めながら動きにつなげた。ゲーム形式の活動をより多く行うことで、チームの連帯感や一体感が生まれた。さらに、チームでディスクをつなごうとする姿から、楽しみながらパスをする仲間との位置関係や空間へ走りこむための動きが見られるようになった。

(2) 主体的・対話的で深い学びの授業づくり

I C T機器を活用することで、学習内容の理解の促進や興味・関心の向上、個に応じた学び、教師と子供の情報伝達や子供同士の教え合いなどの共同学習を期待できる。また、子供の学びをより深いものにするとともに、指導や評価の継続性を確かなものにし、子供の活動時間を十分に確保した授業が展開できる。

C小学校のD教諭は、6年生のマット運動の実践を行った。マット運動の特性として一連の動きを瞬時に行わなければならない、自分の体の状態や自身の課題をつかみにくいといった難しさがある。そのため、D教諭はお互いに演技を見合い、体の状態や課題を伝えるためにiPadのスローモーションで再生する機能を活用した。子供は、iPadを使用し、自分自身の姿を見ることで自己の課題を正しく把握し、明確なめあてをもって取り組んだ。また、学習の深まりとともに、情報伝達能力の高まりやチーム学習の充実、実際の演技や映像から必要なことを抽出して分析することができる能力が高まった。子供のチーム学習が充実することで、活動時間を十分に確保した授業が展開された。

2 来年度に向けて

子供が「わかった」「できた」という達成感を得られる授業を目指したい。子供は、「学ぶ内容が面白い」「学ぶ活動がおもしろい」と感じたいし、「学んだことが生かせる喜び」を味わいたい。その思いに応えることが教師の役目である。そのためには、子供の思いを大事にしなが、子供の知的好奇心をくすぐったり、学んだことを生かしたりするような授業展開を図っていくことが必要である。子供が意欲的で、主体的に学ぼうとしている授業を目指し、子供が学習の見通しをもって進めていけるように授業研究をしていきたい。

岡崎市立小豆坂小学校 杉浦 大作

1 指導員訪問を振り返って

「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた授業が多く学校の学校で実践された。授業者からは、その工夫とともに「運動量の確保を目指した」との言葉を多く聞くことができた。訪問では、放課に運動場で元気よく運動する子供を見た。鬼遊びやボール運動、鉄棒や縄跳び、子供が生み出したオリジナルの遊びもある。発達段階に応じて、体育で学んだのであろう。心身にストレスのかかるコロナ禍だからこそ、運動の大切さを実感する。学習指導要領にある「心と体を一体として捉え、生涯にわたって健康を保持増進」することができるよう、我々は「主体的・対話的で深い学び」を追究していきたい。

(1) 「わかる」と「できる」がつながる基礎感覚づくり

運動の構造や仕組みについての理解（知識）が土台にあるからこそ、子供は自分自身の技の出来栄えやつまづきが明確に認識できる。そして運動を繰り返す中で、自分にとって一番よい動きは何か、知識と感覚が一致し、「わかる」と「できる」がつながる。

A 中学校のB教諭は、2年生の器械運動（マット運動）の実践を行った。B教諭は、導入のスキルアップトレーニングで、指導要領の趣旨を踏まえ男女混合のグループを組み、基礎感覚を高める時間を毎時間設けた。接転技群やほん転技群ができるようになる動きとともに、開始姿勢や終末姿勢、手の着き方や組み合わせなど条件を変えた動きを行った。このように、基礎感覚づくりをしたことで、動きへの気付きを得て、子供は技を滑らかに行うことや組み合わせ方への理解を深めた。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」つながる戦術的な気付き

小学校高学年におけるボール運動では、集団対集団の攻防によって競争する楽しさを味わう中で、自己やチームの特徴に応じた作戦を選び、自己や仲間と考えたことを他者に伝えることが大切である。

C 小学校のD教諭は、5年生のゴール型球技（ハンドボール）の実践を行った。本時のねらいである「シュート場面を作ること」につながるよう、自ら編集した短編の日本代表の攻撃シーンを見せた。子供は日本代表と前時の自分たちのプレーを比較し、攻撃の緩急やボールをもっていない時の位置取りなどの気付きを抱いた。そして気付きを出し合う場を設け、出た意見から、本時にできるようにしたいことを整理し、本時の課題につなげた。このように、目指す姿を整理したことで、子供は、ゲームを終えて動きを確認し合う際に、導入で得た動きや戦術的な気付きを使って、主体的にチームの課題を認識できた。

E 小学校のF教諭は、5年生のボール運動（キンボール）の実践を行った。前時までの学習でうまくできなかったことを出し合う場を設け、子供が出した意見をホワイトボードに思考ツールを使って整理した。そして、本時にできるようにしたいことを引き出し、学習課題を提示した。これにより、子供は前時までの経験と他チームの考えから得た戦術的な気付きを比較し、本時の作戦をどのようにしようか主体的に学びを進めることができた。

2 来年度に向けて

「主体的・対話的で深い学び」の実現のためには、学び合う子供同士の関わりと、発達段階に応じた教師の出を意識して学習を展開することが大切である。子供だけで解決できない課題や技能習得には、教師の出が必要である。「できる」につながる「わかる」を感じる手だてを講じ、友達と学び合う中で、どの子供にも新たな気付きがある授業を目指したい。